

表象される〈半島〉——『行人』と朝鮮統治

柴田勝二

1 暗喩的な分散

『行人』（一九二二～二三）は『坊つちやん』（一九〇六）から『門』（一九一〇）に至る一連の作品とは異なり、主人公が登場するまでに、いくつかの挿話的な物語が提示され、それ以降も登場者によって語られる挿話が展開に織り交ぜられていく構造をもっている。中心的な人物が展開の冒頭から姿を現わさないのは前年の『彼岸過迄』（一九二二）においても同様だが、依頼と報告の連鎖によって主人公の告白が導き出されるこの作品と違って、『行人』では主人公というべき一郎がみずからの軌跡や内面を物語っていくくだりもなく、彼と旅を共にしたHさんという人物の報告によってはじめて、まとまりをもった一郎の輪郭が読み手の元に届けられる。けれども『彼岸過迄』や『ころ』（一九一四）において、かなりの分量をもった告白的な語りのなかに、人物が自身の姿を提示するのと比べて、『行人』における一郎の表象は断片的、間接的であり、傲慢な自己意識と神経症的な抑圧のなかに分裂しているように見えるこの人物が、どのような内面の営為を抱えているのかは、最後まで読み手にとって謎のままでありつづける。もともと一郎の錯雑とした内面は、彼自身にも統握しかねるものであるはずであり、『彼岸

過迄』の須永や『ころ』の先生のように、自己の軌跡を整理して語るといふ任に堪えないかもしれない。そしてこの作品にちりばめられる様々な挿話は、この人物のはらむ内面の錯雑さと照応した表出として受け取られるのである。

その挿話とは、弟の二郎の友人である三沢が、飲み屋で知り合って無理やり酒を飲ませたために胃を壊してしまい、同じく胃腸の弱い三沢自身とともに入院することになった「あの女」の身の上であり、あるいはかつて三沢の家に寄寓していて、自分に思いを寄せているようであった、精神病を患った「其娘さん」の追想である。また中盤では一郎たちの父親が、男と別れてから盲目となった女にまつわる物語を語っている。いずれも女の身の上として語られるこうした挿話は、それぞれの独立性をもちながら、相互に折り重なることによって、一郎の存在へと収斂されていく性格を帯びている。すなわち嘔吐を繰り返す「あの女」の疲弊した肉体も、自他の関係性を掴むことのできない「其娘さん」の精神の病も、他者の姿を捉えることのできない盲目の女の不如意も、すべて一郎が抱えた負性と暗喩的に連繋するからである。周囲の眼に映る一郎の姿は、もっぱら学者的な「偏屈」（帰ってから「二十」）さを隠そうとせず、妻と弟の關係に猜疑の眼を向け、あげくは「僕は絶対だ」（「塵勞」

四十四)と叫ぶ、とめどのない自我意識の空転のなかに吞み込まれた人物である。一郎自身もそれが病的な様相であることを認識しているが、その〈病〉性を予示し、間接的に浮き彫りにしているのが、こうした挿話のなかの女たちの〈病〉にほかならない¹⁾。

とりわけ『行人』に盛り込まれた挿話を貫流する一つの基調として挙げられるものが、他者の心を〈見る―知る〉ことの困難さである。父親の語る盲目の女の挿話はそれをもっとも集約的に示している。父親の話によれば、彼女は「天下の人が悉く持つてゐる二つの眼を失つて、殆んど他から片輪扱ひされるよりも、一旦契つた人の心を確実に手に握れない方が遙かに苦痛なのであつた²⁾」(「帰つてから」十八)という。ここではむしろ「人の心」を〈知る〉ことのできない不如意が、視力の喪失という肉体的な欠損として暗喩的に提示されている。この「人の心を確実に手に握れない」という焦燥は、もちろん妻のお直との関係で一郎を苦しめる重荷でもある。それに指喉されるように一郎はお直の「心」を試すべく、彼女を二郎とともに和歌山に赴かせるのだつた。一郎が叙述に姿を現わす前に語られる、三沢と「あの女」の挿話もこの主題を予示している。「あの女」の肉体の疲弊は、それ自体が一郎の抱えているであろう肉体的な低下を暗示しているが、重要なのは同じ病棟にいる三沢が、彼女について何も知らないという認識の不在である。三沢は彼女に関して「知らないんだ。向は僕の身体を知らないし、僕は又あの女の身体も知らないんだ」(「友達」二十一)と二郎に語らないのである。

この相互認識の欠如を、「身体」の次元から「心」の次元に

移行させれば、そのまま一郎とお直の関係としても読み替えられる。ここではそれを目立たなくするために、あえて「身体」という言葉を繰り返しているともいえるが、それにつづいて二郎が語る、精神病の「其娘さん」の挿話にしても、「僕が外出すると屹度玄関迄送つて出る。いくら隠れて出ようとしても屹度送つて出る。さうして必ず、早く帰つて来て頂戴ねと云ふ」(「友達」三十二)彼女の態度を、二郎が「君に惚れたのかな」(同三十三)と意味づけるにもかかわらず、三沢はそれを「病人の事だから恋愛なんだか病氣なんだか、誰にも解る筈がないさ」(同三十三)という不可知性の域に置くしかないのである。こうした挿話のはらむ他者認識の困難さという問題性が、二郎に「御前他の心が解るかい」(「兄」二十)という問いを投げかける一郎の内面と連結していることはいうまでもない。一郎を苦しめているのは、第一に妻のお直の心を把握しえないことであり、「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚している事丈は慥だ」(「兄」二十)という感覚に脅かされつづけているのである。

けれども重要なのは、一郎の苦悩が決して妻の心を掴むことができないという焦燥に限定されているわけではないことだ。伊豆方面の旅を共にしたHさんの報告として、一郎の輪郭がある程度まとまって語られる「塵労」の章では、一郎自身の言動が随所にちりばめられているが、それが示しているものは、一郎の抱えた内的な重圧の多元性である。「三十一」では「兄さんは書物を読んでも、理窟を考へても、飯を食つても、散歩をしても、二六時中何をして、其処に安住する事が出来ないのださうです。何をして、こんな事をしてはゐられないとい

ふ気分を追ひ懸けられるのださうです」というHさんの報告があり、それにつづいて「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない」という一郎の発話が記されている。この一郎の言葉は、山崎正和が指摘する³ように、彼の意識が自己の生きる現在という時間の向こう側に突き抜けているところから生じているが、一郎の意識に過剰な未来志向を付与している事情はこの報告には語られていない。常識的な推測をすれば、自分の学者としての仕事で、自己実現の正当な場となっていないという焦燥のなかに一郎が生きていたと考えることができるが、彼の具体的な研究の状況には何も言及されていない。むしろ次の「三十二」では、一郎の焦燥は「人間全体の不安」へと敷衍され、「進んで止まることを知らない科学」の発展が、人間を「何処迄行つても休ませて呉れない。何処迄行かれて行かれるか分らない。実に恐ろしい」という感覚を分有していることが、一郎の神経症的な苦悩の所以として位置づけられている。

けれども自己の社会的営為の相対性がもたらす苦悩と、近代の科学文明の進展の速度が人間の精神を疲弊に導くことは、問題性として同じ次元にはない。さらにこれらはそれにつづいて語られる、一郎の「絶対」を希求する自我意識の空転とも直結していない。Hさんと修善寺の山を登った一郎は、咲いている花を指して「あれは僕の所有だ」「塵勞」三十六と宣言し、さらに周囲の森や谷に対して「あれ等も悉く僕の所有だ」「同三十六」と言い放つ。一郎はこうした現象世界的主人に自己を擬そうとする志向をも露わにしており、あげく「四十四」では「神は自己だ」と言い、「僕は絶対だ」とまで宣言する。し

かし一郎が一人の人間である以上、その希求は当然彼の重視する「心理的」「塵勞」四十四の次元においても充たされるはずがなく、「僕は迂闊なのだ。僕は矛盾なのだ。然し迂闊と知り矛盾と知りながら、依然として藻掻いてゐる。僕は馬鹿だ」「塵勞」四十五」という自己への断罪に転化せざるをえないのである。

2 苦悩の多元性

「塵勞」におけるHさんの報告を中心として、一郎の抱えている苦悩を瞥見すると、それが少なくとも三つの種別に分けられることが分かる。一つは妻という共棲者の「心」を掴むことのできない焦燥であり、一つは自身の営為を近代文明の進展に過剰に同調させようとする意欲がもたらす、現在という時間の希薄化であり、もう一つは、自己を絶対化しようとしてなされない、自我意識の空転である。このうち第一と第三の間には照応関係を想定することができる。妻の心を掴むことができないという焦燥は、現象世界を「所有」しようとする一郎の「絶対」への志向と隣接的な関係をなすからである。一方第二の不安は、それらとは別の次元に置かれるべき性格をもっている。つまり第一と第三の関係性が空間的な形式をもつのに対して、過剰な未来志向と背中合わせになった現在の希薄化という問題性は、むしろ個人の時間意識を居場所としているからだ。

もともと漱石が時間の流れに対して鋭敏な意識をもち、人間の生命の連続性と意識の連続性を重ね合わせる作家であったことはいうまでもない。さらに個人の意識的な連続性と国

家・社会を貫く歴史的連続性を相互に比喩化して形象化する着想が漱石にはあり、そこから多くの場合主人公は近代日本の寓意をまとって現われる。この傾向は『行人』の一郎の造形においても顕著である。とりわけ一郎を捉えている第二の問題性は、明らかに漱石が明治後期の日本社会に対して抱く批判意識をそのまま押し当てたものである。それは前年におこなわれた講演『現代日本の開化』（一九一二）での漱石の言葉と、Hさんの報告に含まれる一郎の言葉がほぼ重なっていることから容易に知られる。この講演では周知のように漱石は、日本が維新以来、西洋諸国と肩を並べるために息せき切って開化を推し進めてきた結果、それが十分国民の生活に内在化されず、「外発的」な次元にとどまっていることを批判しているが、その開化の過剰な速度が個人にもたらす弊害が「神経衰弱」であつた。

彼等西洋人が百年も掛つて漸く到着し得た分化の極端に、我々が維新後四五十年の教育の力で達したと仮定する、体力脑力共に吾等よりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費やしたものを、如何に先駆の困難を勘定に入れないにした所で僅か其半に足らぬ歳月で明々地に通過し了るとしたならば吾人（なかば）は此驚くべき知識の収穫を誇り得ると同時に、一敗また起つ能はざるの神経衰弱に罹つて、氣息奄々（えんえん）として今や路傍に呻吟しつゝあるは必然の結果として正に起るべき現象でありませう（以下略）

この言説が「塵勞・三十二」で一郎が語る「人間全体が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経

過しなければならぬから恐ろしい。一代のうちなら末だしもだが、十年間でも、一年間でも、縮めて云へば一ヶ月乃至一週間でも、依然として同じ運命を経過しなければならぬから恐ろしい。（中略）要するに僕は人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験してゐる」という言葉と強い相似性をもっていることは明瞭である。いわば一郎は近代日本の開化のきしみを、個的な意識の連続性のなかでとめどもなく微分しつづける存在であり、それによつて彼は「神経衰弱」に罹つて、氣息奄々（えんえん）として今や路傍に呻吟しなくてはならない。もつとも三浦雅士が「作者は、現代文明を組上に載せたかったために一郎の神経症を用意したのだ」と述べる⁴ように、ここで「神経衰弱」を開化の悪しき派生物として一郎に担わせようとする漱石の企図は、やや素朴に露出してしまっているところがある。『それから』の代助も一郎と同型の人物であつたが、代助の場合は労働に対する潜在的な志向をはらみながら、企業の歯車となつて自己を喪失することを憎むためにそれを拒むとともに、その忌避自体が一つの抑圧として彼に作用するというアイロニーが、社会状況との照応のなかである程度の具体性をもつて描出されていた。それに対して『行人』の一郎の文明論的な問題意識は、家庭内の人間関係による苦悩と暗喩的な関係をなすことによつてはじめてその手触りを生じさせる性格が強いのである。

こうした主人公の苦悩の観念性は、確かに三浦雅士が批判するように、この作品のもつ瑕疵であるといつてもよい。けれどもそのために一郎という人物に担わされた寓意性は明瞭であり、そこからこの作品を見直すことによって、新たな把握の地

平が生まれる可能性があるとさえいえる。先に挙げた、一郎の抱えた三種の問題性も、一人の人間の内で有機的な連繋をなしているというよりも、漱石が同時代の日本に対して抱く問題意識を一郎に集約的に託すことによつてもたらされている。そのため一郎は自己の苦悩を統握する語り手になりえず、その問題性も複数の挿話に分散的に担わされることになったといえよう。そう前提することで、やや距離のある第一と第二の問題性が密接な連関をもち、一郎をもつとも悩ませている第一の問題性が、その連関から括り出されてくる具体性を帯びていることが見えてくるのである。

これまでの作品においても明らかであつたように、漱石が作中に表象しつづけた日本の近代化の大きな問題は、近隣の東アジア諸国への帝国主義的な侵攻であつた。漱石自身の文明批判とも重なる第二の問題性は、一見日本人の生活スタイルの〈西洋化〉が生じさせるものにも見えるが、「徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機」(『塵勞』三十二)といったテクノロジーの進展自体が、人間を「神経衰弱」に追いやるのは考え難い。日本人が疲弊しているのは、『三四郎』の広田先生や『それから』の代助が批判するように、第一に日露戦争後の経済状況が停滞しているからであり、不況と重税のために「氣息奄々として今や路傍に呻吟しつゝある」おびただしい民衆が存在していた。こうした民衆の疲弊を代償として、日本は後発の帝国主義国家として膨張をつづけ、韓国(朝鮮)、台湾、満州などを植民地化していった。とりわけ『それから』『門』の背後にある明治四三年(二九一〇)の韓国併合は、新渡戸稲造が一高の入学式の演説で

「今や我が国はヨーロッパの諸国よりも大国となつた」と述べ⁵、『日本及日本人』の論説が「日本帝国は、台湾と樺太一半と朝鮮を合併して拡大を事実にし、強国たるが上に、更に大国として世界に列するに及べる」(『拡大せる日本帝国の今後』『日本乃日本人』一九一〇・九)と豪語したように、日本の帝国主義的欲望の達成を印す出来事であつた。そして『行人』の主人公が近代日本の露わな寓意であるならば、この作品全体を貫流している一郎の、周囲を侮蔑するような居丈高さは、何よりも「ヨーロッパの諸国よりも大国となつた」日本の、傲岸な眼差しの形象化にほかならないといえよう。

もちろん漱石はそうした傲慢さを肯定して描いているわけではない。一郎が一方では神経衰弱に悩まされ、日々の生活を少しも楽しむことができないのは、こうした日本の到達した状況に対するアイロニー以外ではない。このアイロニーを端的に表象しているものが、一郎たちが和歌の浦で乗るエレベーターである。二郎の在阪中に、一郎は妻のお直と母を伴つて和歌の浦に旅し、そこに設置されたエレベーターに、合流した二郎と一緒に乗っている。この作品の前半が関西で展開していく理由の一半は、彼らをこのエレベーターに乗せることにあるといつてもよい。これは明治四三年に和歌の浦の旅館望海楼が客寄せのために作った、三〇メートルの高さをもつ日本最初の鉄骨製エレベーターであり、漱石自身も『現代日本の開化』の講演に和歌山を訪れた際に利用している⁶。このエレベーターの隣には「東洋第一エレヴェーターと云ふ看板」(『兄』十六)がかかり、「地面から岩山の頂まで物数寄な人間を引き上げる仕掛」(同)が一郎たちの注意を惹きつけ、二人で試乗することになったの

である。

二人は浴衣掛で宿を出ると、すぐ昇降機へ乗った。箱は一間四方位のもので、中に五六人這入る戸を閉めて、すぐ引き上げられた。兄と自分は顔さへ出す事の出来ない鉄の棒の間から外を見た。さうして非常に鬱陶しい感じを起した。

「牢屋みたいだな」と兄が低い声で私語いた。

「左右ですね」と自分が答へた。

「人間も此通りだ」

兄は時々斯んな哲学者めいた事をいふ癖があつた。自分は只「左右ですな」と答へた丈であつた。けれども兄の言葉は単に其輪廓位しか自分には呑み込めなかつた。

(「兄」十六)

ここでエレベーターに仮託して語られている、「東洋第一」であり、同時に人間を閉じ込める「牢屋みたい」な空間が、韓国併合後の〈日本〉を指していることはいまでもない。開国以来休むことなく「殖産興業」と「富国強兵」を推し進めた結果、日本は「東洋第一」の〈強国〉となるとともに、そこで暮らす人間を抑圧する「牢屋みたい」な空間に変じることになった。そして一郎はこの空間のなかの住人であると同時に、それ自体の寓意的存在であるために、その両面性を象徴する設備に「一寸あの昇降器へ乗つてみようぢやないか」(「兄」十六)と感応し、その結果「人間も此通りだ」という否定的な同一化をおこなわざるをえないのである。

3 〈半島〉の空間性

このエレベーターの挿話にも示されているように、『行人』の軸をなしているのは「東洋第一」の〈強国〉に成り上がった日本の帝国主義的な傲慢さを表象する、主人公一郎の自我意識の空転だが、前半で彼が家族とともに赴くのが「和歌山」であり、終盤のHさんの報告のなかで、一郎が彼と旅するのが「伊豆」方面であるという設定は、この作品の基調と密かな連繋を示している。興味深いのは、一郎の意識がとりわけ傲慢な様相を呈するのが、この二つの旅先においてであることだ。和歌山の浦で一郎は妻のお直の心を試すために、彼女を二郎とともに和歌山に赴かせ、そこで台風に遭遇することによって彼らは同宿することになる。もちろん二人の間には何事も生起しないが、この奇怪な実験を一郎におこなわせるには、「和歌山」の空間性が作用していると見ることができる。またHさんと赴いた伊豆の地で、一郎は先に挙げたような、地上の事物を自己が所有し、自身を神に擬するかのような宣言を繰り返す。こうした空疎な発話を彼にさせているのも、その旅先が「伊豆」であつたからだと考えられるのである。

もともと和歌山や伊豆の地域性自体が、一郎の行動や発話にエキセントリックな彩りを付与しているわけではない。この二つの空間を結びつけているものは、〈半島〉という地理的属性である。すなわち一郎は「紀伊半島」と「伊豆半島」に赴くのであり、この二つの半島が、日本人の重大な関心事でありつづけるもう一つの半島、つまり「朝鮮半島」という空間を召喚することになるのである。実際この二つの半島は形状が朝鮮半島

にある程度近似しており、また併合後の朝鮮が単に「半島」と称されるのはありふれた表現となる。そのため一郎をこの二つの半島に赴かせることが、彼——近代日本——と〈朝鮮〉との関わりを擬似的に浮び上がらせることになるのである。終盤に語られる伊豆への旅においては、それがより明瞭な形で表象されている。ここで一郎は「神は自己だ」「僕は絶対だ」（ともに「塵勞」四十四）といった科白を吐き、その前には山の上から眼に入る光景を指して「あれ等も悉く僕の所有だ」（同三十六）という宣言をおこなうのだったが、こうした言葉は東京にいる一郎の口から出ることはなかった。それらは決して、単に旅先で友人と二人だけでいるという状況が促したのではなく、やはり彼が赴いた先が、こうした傲慢な眼差しを誘発する空間だったからにはかならない。すなわち一郎とHさんが旅をしている「伊豆半島」が、「朝鮮半島」を擬似的に縮小した空間であるために、そこでの眼差しが〈朝鮮〉への意識を模倣する形で発動してしまっているのである。

そう考えれば、一郎の言説は必ずしも奇矯なものではないことが分かる。つまり朝鮮が日本によつて植民地化された空間であるなら、〈宗主国〉である日本を象る一郎が、そのすべてが「悉く僕の所有だ」と言うことは自然だからだ。そしてこうした宗主国的な傲慢さを一郎に露わにさせる条件を、同伴者であるHさん自身が担っていることも見逃せない。この旅で一郎は文字通り傍若無人の発言を重ねていくが、この箍^{たが}をはずしたような言動を一郎におこなわせているのは、彼が〈半島〉ににいるという地理的条件に加えて、Hさん自身が植民地的な輪郭をはらんだ人間だからだと考えられる。すなわちここでHさんはもう一

つの植民地的空間としての〈中国〉を表象する存在として現われているのである。それは語り手の二郎がHさんに初めて会った時の印象に明示されている。

丸い顔を丸い五分刈の頭を有つた彼は、支那人のやうにくく肥つてゐた。話振も支那人が慣れない日本語を操つる時のやうに、鈍かつた。さうして口を開くたびに、肉の多い頬が動くので、始終にくくしてゐるやうに見えた。

（傍点引用者「塵勞」十四）

ここで二度も繰り返される、「支那人」の直喩は、Hさんを〈中国〉の換喩として位置づけることになる。一郎と同じ学者であり、「記憶の好い」（「塵勞」十五）頭脳をもつた人物の「話振」が「支那人が慣れない日本語を操つる時のやうに、鈍かつた」と形容するのは不自然な取り合わせのやうにも映るが、それは彼に付与された地理的な文脈を前景化するため以外ではない。つまりHさんの報告を見る限り、伊豆の旅における一郎の言動は、決して同僚に対する敬意を払いつつなされたものとはいえず、〈主〉としての一郎の発言の恣意性に〈従〉としてのHさんが追隨している側面が強いのである。もちろんそれは神経質な一郎と対比的なHさんの「鷹揚」「塵勞」二十七な性格にもよっているが、この「鷹揚」さも、明治三八、九年の「断片」に「支那人は呑気の極鷹揚なるなり」とあるやうに、漱石のなかでは〈中国〉に結びつく属性にほかならない。そしてこの性格の作用もあつて、旅のなかで交わされる議論の話題はほぼつねに一郎から出され、その進行においても一郎が主導権を握ってい

る。一郎が自己の〈絶対性〉を主張するくだりにおいても、Hさんはこの明言の奇矯さを指摘するというよりも、むしろ一郎の言葉を受容的に反復している。

「神は自己だ」と兄さんが云ひます。兄さんが斯^かう強い断案を下す調子を、知らない人が蔭で聞いてみると、少し変だと思ふかも知れません。兄さんは変だと思はれても仕方のないやうな激した云ひ方をします。

「ぢや自分が絶対だと主張すると同じ事ぢやないか」と私が非難します。兄さんは動きません。

「僕は絶対だ」と云ひます。

（「塵勞」四十四）

重要なのは、人が「少し変だと思ふ」やうな発言を一郎がここですることに、いささかも躊躇していないということであり、このやり取りの後、一郎の言動がさらに常軌を逸していったことがHさんの報告として記されている。二郎に対しても見せないやうな荒々しい言動に一郎がのめり込んでいくのは、〈半島〉の空間性と、Hさんがはらむ〈中国〉としての時局的な劣位性が相乗して彼に作用しているからだといえよう。

そして伊豆の旅における一郎の振舞いが、同じ〈半島〉への旅であつた和歌山での出来事にも、遡及的に当てはめられることは明らかである。ここで一郎が、二郎とお直に同宿させるといふ計画を思いついて実行させるのは、やはり周囲を優越する意識が彼の内で強く発動していたからだと考えられる。一郎はお直が二郎に愛情を抱いていることを疑つており、その内心を

探らせるために、二郎と共に旅をさせようとするが、それはいかえればお直が自分に帰属する度合いを、二郎を介して確認しようとする試みである。こうした実験は、二人を東京からどこかへ旅行させることによつても実現しうるが、それを和歌山の旅先で思いつく一郎の内側には、お直の〈所有者〉としての意識があらためて喚起されていたからにほかならない。

男性主人公と彼が志向する対象である女性との間に別の男性が介在するという三角関係の構図は、いうまでもなく漱石の作品世界に繰り返し姿を見せるものであり、『行人』もこれらの作品、とりわけ『それから』『門』における構図を継承している。これまで見てきたように、この二つの作品では、主人公が得ることになる女性性は、日本の帝国主義的欲望の対象としての韓国（朝鮮）の寓意であり、ライバルとなる男性は、それに対する抵抗者としての韓国民衆を象つていた。この寓意的な照応もこの作品に引き継がれており、これまで見た一郎の周囲を睥睨する眼差しが、日本の東アジア諸国に対する優越意識を象つていることはいうまでもない。『行人』が『それから』『門』と明瞭な差異をなすのは、『それから』の平岡や『門』の安井が、直接間接に主人公に脅威を与える存在であつたのに対して、彼らに相当する位置にいる『行人』の二郎が、一郎を脅かす度合いがきわめて希薄なことだ。第一に二郎は一郎の〈弟〉であるという近しさのなかにいる人物であり、お直も彼から奪い取られた女性ではない。むしろここでは一郎は、自身を捉えている不定形の焦燥に形を与えるべく、あえて方向性の明瞭な不安を仮構しているようにすら見えるが、その前提となつてゐるのが、一郎の身に及んでくる脅威の不在なのである。

一郎を脅かしうる存在でありながら、弟としての従属的な位置にとどまりつづける二郎に端的に仮託される、周囲の人物の一郎に対する微力さは、明らかに併合後の日本と朝鮮との関係と照応をなしている。『それから』の背後には明治三〇年代後半から四〇年代前半にかけて頻発した義兵の蹶起があり、『門』の起点には、話題として言及されるように、明治四二年一〇月に起きた、安重根による伊藤博文暗殺事件が横たわっている。漱石の作品世界で主人公に脅威を及ぼす存在として現われる男性は、韓国を植民地化しようとする日本に対するこうした抵抗の姿勢の形象化にほかならなかった。安重根の影を宿した『門』の安井が大陸から日本に帰還するという情報だけで、宗助が恐慌をきたしてしまうように、併合前の韓国は日本人にとって得体の知れない脅威の在り処として受け取られる空間であった。たとえば伊藤博文の暗殺直後の『東京朝日新聞』には、「恐ろしい朝鮮」と題された紀行文（筆者は玄耳）が連載されており、その第一回（一九〇九・一・五）には、韓国の統治に毎年「三千万円からの汗水」を注いでいるにもかかわらず、「まだく此末どれ丈厄介が掛つてどれ丈金と人とを費さねばならぬやら、思へば日本に取つて此程恐ろしい国はあるまい」という感慨が冒頭に記されている。

こうした「恐ろしい朝鮮」のイメージは征韓論の時代から存在したが、とりわけ伊藤暗殺後は現実に反日運動が各地で生じたこともあって、日本人の間であらためて強化されることになった。渡韓を企図する者に向けて書かれた文章でも「統監政治が布かれて、既に前後五年に及んだ今、猶日人の韓国地単独旅行は至極危険で、護衛巡査が付かねばならぬと云ふ情

ない有様にある」（真継義太郎「渡韓せんとする者は如斯き用意と覚悟とを要す」『実業之世界』一九〇九・一二）⁷という警告がされたりしている。そこには文字通り日本を脅かす隣国としての韓国の姿が浮び上がっているが、こうした〈恐ろしさ〉は「朝鮮」が正式の呼称となった併合後には次第に低減していく。それは反日運動に対する封じ込めが徹底されたことに加えて、日本からの移住者が急増し、朝鮮が日本人の生活圏としての比重を高めていったからである。中根隆行の『朝鮮』表象の文化誌（新曜社、二〇〇四）によれば、朝鮮における日本人居住者は、明治三九年（一九〇六）には八万三千人余であったのが、併合が成立した明治四三年（一九一〇）には一七万一千人余へと増加している。また漱石の『彼岸過迄』にも言及があるように、不況が深刻化する国内に見切りをつけて、朝鮮に職を得ようとする者も珍しくなかった。こうした傾向に対して、朝鮮が「意外に秩序立ち意外に取締の厳重にして一攫千金を夢みる能はざること、意外に黄金の落ちて居らざること、就職口の少なきこと」（旭邦「客に朝鮮の近事を語る」『朝鮮』一九一・一〇）⁸が実情であるという、現地からの警告も寄せられていた。こうした趨勢のなかで、朝鮮のイメージは「恐ろしい」国とは別個のものに変容していく。第一に政策的にも日本は隣接する朝鮮を「同化」する方向性を取り、日本人の価値観をいかに朝鮮人に浸透させるかという議論が重ねられることになった。その際前提とされるのは、地理的な近しさに伴う人種的な類似性である。たとえば大隈重信は併合直後の明治四三年九月に、「日韓両国は太古より既に一体となるべき関係を有して」おり、「骨相からいふと日本人と朝鮮人は能く似て居る」といっ

た共通性をもつ以上、「朝鮮人も同化されて日本人となるを得べしと信ずるのである」と明言していた（「朝鮮人には如斯して日本魂を吹込むべし」『実業之日本』一九一〇・九）⁹。法学者の浮田和民も「日韓人民は古来同種同文の一民族にして親密なる関係を有し、民族史上より観察すれば日韓同化の容易なる可きは固より疑を容れざる所なり」（傍点原文、「韓国併合の効果如何」『太陽』一九一〇・一〇）と述べるように、地理的、人種的な近似性を根拠として、訓育によつて朝鮮人を日本人に同化させようという前提が統治の基本に置かれることになった。『行人』の連載が開始された大正元年（一九一二）には「本国人と、鮮人の関係は、仲の良い夫婦、仲の良い兄弟の同棲の如き状態でなくてはならぬ。（中略）即ち日本人は鮮人を見ること愛する弟の如く、鮮人は日本人を見ること敬愛する兄に對する如く成ればよいのである」（傍点引用者、小宮三保松「大正の新時代を迎ふるの感想」『朝鮮及満州』一九一二・二）¹⁰といった感想が、朝鮮統治の任にあつた人間によつて提示されているのである。

4 被抑圧者のしたたかさ

日本と韓国を「夫婦」に見立てる視点は、併合前後にもあつた一般的なものであり、『それから』『門』の主人公が、友人に帰属していた女性を奪い取ろうとする展開が、それを下敷きにしていることはすでに眺めたとおりである¹¹。逆にいえば、少なくとも〈夫と妻〉の異質性が二つの国の間に想定されていたということでもあるが、併合後朝鮮が〈日本〉となることに

よつて、血のつながつた「兄弟」として両者を連繫させようとする着想が、とくに朝鮮の統治に関わる者によつて出されるようになる。しかし日本と朝鮮の間に想定される「兄弟」的なつながりを前提として「同化」を推し進めようとすることは、逆に〈日本人〉ではありえない朝鮮人の異質さを浮び上がらせることになる。この時期に多く書かれた朝鮮渡航者の見聞記、体験記を見ても、一様に記されているのは、内地人と比べて著しい衛生の觀念の欠如であり、無愛想としか思えない対人的態度であり、庶民における労働意欲の希薄さである。最後の点については、それが長年にわたる官吏や兩班による搾取の結果であるという洞察を多くの筆者がおこなっているが、「不潔」さと「無愛想」さも、文化的な慣習の差異に帰着されるものであり、それ自体が必ずしも朝鮮人の劣位性を物語っているわけではない。しかし日本人の眼に映つたこうした文化、慣習の差異が、日本人の「兄」としての意識を喚起する契機となつたであろうことは容易に察せられる。

こうした日本人の併合後の朝鮮に対する認識は『行人』に明瞭に織り込まれている。興味深いのは、「同化」を建前とすることによつてかえつて強く前景化されてくる朝鮮の他者性が、もつぱらお直の形象に託されていることだ。すなわちここでも二郎とお直はともに〈朝鮮〉の表象だが、二郎が併合によつて日本の「弟」となり、日本への脅威の度合いも低減させていった朝鮮の政治的な位相を表していたとすれば、お直はその趨勢のなかで、逆に日本への他者性を開示し始めた生活者としての朝鮮を象っている。先に挙げた、日本人の眼に映つた生活者としての朝鮮人の輪郭は、はつきりお直に託されてい

る。たとえば「愛嬌に乏しいのは朝鮮婦人の通弊」（愚堂「余の初めて見たる朝鮮」『朝鮮』一九二一・三）¹²といった記述が見られるのと符合するように、お直も「持つて生れた天然の愛嬌のない」（「兄」十四）女性として語られている。またお直は自分を「魂の抜殻」（「兄」三十一）と表現し、「私が冷淡に見えるのは、全く私が腑抜の所為だつて」（「兄」三十二）と二郎に語っているが、朝鮮の庶民が官吏や両班の搾取によつて活力と自律性を欠き、表情の乏しさもその反映として捉える観察は多くなされている。「朝鮮人は由来無事を樂む民なり、事無れ主義の民なり」（旭邦「併合一週年の朝鮮」『朝鮮』一九二一・九）¹³、あるいは「朝鮮人は敵愾心少く反抗力少き割合には、又陰柔と云ふ方で中々心服と云ふことの少くない性質を持つて居る」（小宮三保松「併合の目的は同化に在り同化せんとせば先ず彼我親善融和せざるべからず」『朝鮮』一九二一・九）¹⁴と記される朝鮮民衆の印象は、「腑抜」で「冷淡」であるという、お直の自己規定と重なる部分が大きい。

とくに最後に挙げた記事に述べられている朝鮮人の二面的な性格は、ほとんどお直のそれとしても読み替えられる。お直自身が「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆らはない」（「塵勞」三十七）という「敵愾心少く反抗力少き」態度を示すにもかかわらず、「中々心服と云ふことの少くない性質」をうかがわせて、その内心を一郎に忖度させつづけているのである。「彼等の心底何の活火が在るかは容易に知るべからざれども、亦容易に心服せしむべからざるものあるは疑ひない」（筆者不詳「朝鮮に於ける感想」『新人』一九二一・八）¹⁵といった声も出されているように、併合後の日本と朝鮮の関係に見出される、「同

化」しうる相手として朝鮮人を見なそうとすることが、かえつてその内面を不可視のものとして浮上させるアイロニーが、一郎とお直の関係に託される形で『行人』の主題としての位置を占めていることができる。

この表出の寓意性によつて、1節で挙げた、一郎が抱えている一見異質な第一と第三の問題性の連関も理解しうる。一郎が「兄・二十」の章で二郎に語る、「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐることだけは慥だ」という言葉が、併合後の日本と朝鮮の関係を含意していることはこれまでの考察によつて明らかだが、「支配する者」が「支配される者」の「スピリット」を把握しようとするのは、日本の朝鮮に対する統治の性格を示唆してもいる。つまり帝国主義的な侵攻において、宗主国が植民地の人間の「心底」を掴もうとするのは一般的な傾向ではないからだ。通例〈主人―奴隷〉の関係において重要なのは、奴隷が主人に全面的な恭順の姿勢を示し、求められた労働を十分にこなすことであり、その「心」のあり方は本質的な問題とはならない。それは古代のアテネや一九世紀のアメリカの状況を見るまでもないが、植民地支配においても、たとえばイギリス人が直接統治時代にインド人に対しておこなった振舞いは、ヒンズー教をはじめとするインド人の価値観を否定し、彼等を「野蛮人」と見なして、みづからカーストの最上位を占めようとするものであった。統治者としてのイギリス人に、人種、宗教を異にするインド人の「心」を把握しようとする志向は皆無であった¹⁶。

もちろん日本による朝鮮の植民地支配が肯定されるべきものではないが、少なくともこうしたイギリス人のインド統治と

比べれば、朝鮮人の価値観を日本人のそれに歩み寄せようとする試みがなされていたことは否定できない。近代日本の形象化である一郎が、第三の問題性として抱える、現象世界を「所有」しようとする欲求と、第一の問題性である、妻のお直の「心」を掴み取ろうとする志向が、彼の内で連結しうるのはそれを映し取っている。日本の統治がこうした方向性を取っているからこそ、そこに「心服」し切らない朝鮮人の心性が前景化されてくるのである。

それはいい換えれば日本の統治下にあつて、朝鮮人が「日本人」になり切らないしたたかさを保持しつづけたということである。同じ植民地であつた台湾と比べても、そうした朝鮮人の民族意識の強さから「台湾よりも大に、且つ台湾よりも治めがたき朝鮮」（『中央公論』「社論」一九一・五）という印象を日本人に与えがちであつた。見逃せないのは、こうした印象を反映するように『行人』のお直が、一郎に表向き恭順の姿勢を示しながらも、彼に「心服」し切らない内心を漂わせ、また現実には己の連続性となるものを外的に確保するしたたかさをもつ人物として描出されていることだ。それは具体的には、彼女に芳江という子供がいることによつて示されている。芳江は一郎とお直の間にできた子供であるにもかかわらず、妹のお直が「芳江さんは御母さん子ね」（『帰つてから』三）と評するように、明らかに一郎よりもお直に帰属する存在として位置づけられている。このお直の科白の直前にも、「母の血を受けて人並よりも蒼白い頬をした少女は、馴れ易からざる彼女の母の後を、奇蹟の如く追つて歩いた。それを嫂は日本一の誇（ほこり）として、宅中（うち）の誰彼に見せびらかした」（傍点引用者、「帰つてから」三）という記

述がされており、芳江が一郎ではなくお直の「血を受け」ていることが明示されているのである。

もちろんこの芳江の位置づけは、お直が一郎以外の男性と姦通したことをほのめかすためではない。『門』においては御米が流産、死産を繰り返して、子供をもうけることができないでいたが、それは易者に「人に済まないことをした」（十三）報いであると告げられるように、韓国の国土を民衆から奪い取る日本の帝国主義的侵攻に対する、漱石の批判的な眼差しの寓意化として眺められた。お直が御米の後身であるなら、彼女が子供をもうけ、それを「誇（ほこり）」として「見せびらかす」というのは一見理屈に合わないようにも見える。けれどもむしろそこに日本の帝国主義的な進展を模しつづ、そこに状況への批判と未来への視点を織り込もうとする、漱石独特の造形が現われている。つまり『それから』の三千代や『門』の御米が、帝国主義的欲望の対象としての「領土」を形象化していたのに対して、『行人』のお直は、すでにその欲望が達成された後に、より身近に生きる「人間」となった朝鮮を表象しているからだ。三千代や御米が自他の「死」をはらんだ存在としての性格をもっていたのに対し、お直が恭順さのなかでしたたかさを漂わせた存在として描出されているのはそのためである。娘の芳江は、「母の血を受けて」と記されているように、被抑圧者の無化され切らない生命の連続性の証しにほかならない。そこに朝鮮が植民地化されながらも、途切れることなくその「血」がしぶとく後世に伝えられていくという、漱石のヴィジョンを見ることができるのである。ちなみに芳江の「蒼白い頬」と形容される顔色の悪さは、朝鮮の学校への視察者が「同校の生徒は顔色

甚だ悪しく」(石田新太郎「同化策より見たる台湾人と朝鮮人」『朝鮮』一九二・九)¹⁷と記しているように、栄養状態の悪さから朝鮮の子供たちに一般的に見られる特徴でもあった。

5 傲慢と孤立

総じて『行人』においては、従属的な位置にあった者が、その従属性を脱して自立していくという経緯がアナロジとして繰り返される。後半二郎が家を出て下宿を始めるのはその端的な例であったが、展開の冒頭で大阪に赴いた二郎が訪問する岡田も、もともとは「自分の家の食客」(「友達」二)であり、「勝手口に近い書生部屋で、勉強もし昼寝もし、時には焼芋なども食」(同二)つていた。また彼等の家から嫁いでいく「お貞さん」にしても、「自分の家の厄介もの」(「友達」七)として女中の人物であった。語り手の二郎自身を含めて、こうした従属的であった人物たちがそれなりの自律性を獲得していくという変容がちりばめられることによつて、お直自身の一郎に対する非従属性が暗示されることになる。これは「あの女」や精神病の娘、盲目の女といった女性たちの輪郭が、一郎の抱えている内的な問題を暗喩していたのと対称をなす構図である。

こうしたアナロジのなかで、一郎が懷疑するように二郎とお直の間に、ある種の親密さが想定されるのは当然であるといえよう。これまで見てきたように、寓意的な次元においても、二郎とお直とともに〈朝鮮〉の表象である以上、彼らは〈一体〉であつてもおかしくない者同士である。一郎は二郎とお直

の親密さの場面を直接目撃したわけではないが、二人の間に親密な空気が流れていることは事実であり、敏感な一郎がそれを性的な地平に置き直していた蓋然性は十分想定しうる。その点について藤沢るりは、お直の結った髪型に対して二郎が「兄さんの御好みなんですか、其でこゝ頭は」(「兄」八)とからかい、それに対してお直が「知らないわ」(同八)と返事をする関係が、一郎とお直の間にはありえず、したがって一郎の「直は御前に惚れてるんじゃないか」(「兄」十八)という懷疑が、決して「突然」(同十八)のものではなかったことを指摘している。藤沢はこのやり取りを、二人の「相性の良さ」の現われとして眺め、彼らの間に男女の愛が介在している証しとは受け取つてはいない¹⁸が、二人のやり取りをたびたび耳にしているであろう一郎が、そうした憶測をおこなつたとしても不思議ではない。

もちろんお直とのやり取りにおける二郎の発話に滲出している親しさ自体が、彼女への二郎の好意を傍証していると見なしうる。興味深いのは、二郎がおそらくお直に好意を抱いているにもかかわらず、彼自身はそれに対してほとんど無自覚であり、一郎をはじめとする周囲の人間の反応によつてそれが浮上してくるという構造である。「直は御前に惚れてるんじゃないか」¹⁹と一郎に唐突に尋ねられた際にも、二郎はそれをありえない仮定として斥けながら、つづけて「だつて御前の顔は赤いぢやないか」(「兄」十九)と一郎に切り返されると、「實際其時の自分の顔は赤かつたかも知れない」(同十九)というとまどいのなかに投げ込まれてしまう。また中盤で二郎が妹のお重の結婚を話題にした際も、お重は「あなたこそ早く貴方の好きなねえ嫂さん見た様な方をお貰ひなすつたら好いちやありませんか」

（「帰つてから」九）と反撥し、二郎を不機嫌にするのである。兄や妹にこうした発言をさせてしまうのは、やはりその客観的な等価物というものを、彼らが日々の二郎とお直の関係から受け取っているからにほかならない。にもかかわらずそうした好意や親密さの表現に対して二郎はほとんど無自覚なのである。先に挙げたお直の髪型をめぐる科白にしても、おそらく二郎自身は単に日常的な儀礼として口にしてしているつもりであるに違いない。

こうした、自己の関心の傾斜に対して無自覚でありながら、それを外在化させてしまう人物の振舞いは、漱石の作品にこれまで表象されている。『門』の宗助が、歯医者待合室にあった『成効』（『成功』）という雑誌の表題と内容に対して距離を感じながら、結果的にそれに動かされる形で、論語を繙くという行動をおこなっていたのは、その一例である。『それから』においても、労働を否定する代助の内にはむしろ労働への志向が潜在しており、そのため平岡との議論でも発言に矛盾をきたして論破されてしまうのだった。この意識の表層から乖離した他者的な情動は、彼らが社会に流通している価値観を浸透させながら、自己意識を発動させるという、漱石独特のゲシュタルト的な意識観のなかを生きていることによってもたらされている。『文学論』（一九〇七）の前提となつたと推される「ノート」に「此 focal idea を F に示せば、 $F \parallel n \cdot f$ ナリ f ハ一己（個）人の focal idea を云フ」と記され、それにつづけて「仮令（たと）へバ日清戦争ノトキノ日本人全体ノ意識ノ focus は此戦争ニアリ故ニ当時尤モ日本人全体ノ意識ノ focus ハ此戦争ニアリ」という例が挙げられている²⁰ように、漱石の内には個的な意識の集

合体が社会に流通する観念の普遍的な地平を形づくり、個人の意識活動はそれを取り込みつつ発動するという着想がある。そのため彼らの自己意識の統御が曖昧になつた地点では、しばしばその意識の方向性に逆行する傾斜が浮上してきてしまうのである。

『行人』ではこの乖離が、人間の情動の他者性という主題を示唆しながら、同時に作品のはらむ時代的な寓意性を補強する機能を果たしている。つまり二郎とお直がともに〈朝鮮〉の表象であるならば、二郎がお直に対してほとんど無意識に示す親密さとは、日本の統治に逆行する朝鮮民衆の〈祖国〉への愛着を物語るものとなるからだ。そして二郎の受容的な態度に感じるように、お直の二郎への接近も否定しえない傾斜として存在している。もともととお直が「妾のやうな魂の抜殻はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう」（兄「三十一」）という認識をもっている以上、親しい言葉をかけてくれる相手である二郎に好意をもつのは自然である。二郎が家を出て下宿を始めた際にも、お直は彼の下宿を一人で訪れ、火鉢を挟んで「顔と顔の距離があまり近過ぎる位の位地」（『塵勞』四）で二郎に向き合ったりしている。

この表面的な恭順を示しながら、心性としての離反を（主）としての人物に感じ取らせているお直と二郎は、統治しつつも「心服」しえない頑強さを感じ取らせていた半島の朝鮮民衆と明らかな照応をなしている。一郎が「己は自分の子供を綾成（あや）す事が出来ないばかりぢやない。自分の父や母ですら綾成（あや）す技（あや）を持つてゐない。それどころか肝心のわが妻さへ何うしたら綾成（あや）せるか未だに分別が付かないんだ」（「帰つてから」五）とい

う感慨を覚えているように、日本も宗主国として朝鮮を統治し、その民衆を「同化」することに力を入れながら、彼らを「綾成す」——「心服」させることの困難さを受け取りつつけていた。そして一郎の不安や焦燥が半ばはみずからの傲慢さが招いたものであるように、日本の統治者が朝鮮民衆を「同化」しきれない隔靴搔痒の思いを抱くのも、併合の際に大隈重信が掲げたように、言語、慣習をはじめとして朝鮮民衆に「日本魂を吹込む」という、自国の文化の押しつけを建前としていたからにはかならない。

もつともこうした照応を想定しても、一郎の傲慢な自我意識の空転は過剰なものとして映らざるをえない。Hさんの報告に語られるように、一郎は「絶対」の境地を志向しつつ、「絶対」でありえない個的な人間の枠内で呻吟しつづけるが、この狂気に近接していくような苦悩を、日本が朝鮮統治によって喚起されていたわけではない。そうした状況を踏まえれば、一郎の自我意識を過剰に空転させ、さらに「Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit! (孤独なるものよ、汝はわが住居なり)」（『塵勞』三十六）という、ニーチェの『ツアラトウストラ』の一節²¹を引用してその孤独を訴えさせている時代的な文脈は、むしろ日本と朝鮮の関係の外側に求められる。すなわち朝鮮と台湾を領土とすることによって、日本が「東洋第一」の帝国に成り上がったにもかかわらず、そこに安住しきれない国際的な状況が日本を取り巻いていたのである。

それはもつばら、対西洋の關係に起因するものであり、日露戦争後日本が帝国主義国として、半島と大陸における利権の拡張に邁進することによって、西洋諸国との緊張關係を高めてい

た状況があることを念頭に置く必要がある。日露戦争の仲裁役となったアメリカは、戦後日本の軍事力を脅威とすることで黄禍論を生じさせ、在米邦人の排斥がおこなわれるなど、一転して日本に対立的な国としての相貌を帯び始める。一方イギリスは日英同盟を持続させていたものの、日露戦争後はドイツのヨーロッパにおける進出を阻止するために、他の列強諸国との連携を強化する方向を取り、とくにアメリカへの接近が図られた結果、日本に対して距離を置こうとする流れが次第に明確になっていった。その背景には、日本が戦後ロシアとの間に二度にわたる協商条約を結び、連帯關係を強めていった事情があるが、イギリスはロシアとともに日本の韓国併合に同意したものの、日本のこうした拡張に強い警戒心を抱くようになり、日本に対する世論も悪化していく。そして明治四四年（一九一）の日英同盟改訂の際には、将来日米が戦争關係に入った時に、イギリスが日本に加担しない旨の但し書きが加えられ、それ以降に顕在化していく日本対英米の対立の端緒が開かれることになったのである。

一方明治四三年（一九一〇）にロシアとの間に結ばれた第二次日露協商は、満州における両国の勢力範囲とそこでの活動を明確にするものであったが、国民感情としては、三国干渉から日露戦争に至るまで、日本人の敵対的な感情を吸収する対象であったこの国を親密な相手として捉えることは難しかった。有馬学が紹介するように、一九一七年にロシア革命が勃発した際には、この革命が「恐るべき、忌むべき、憎むべき呪詛」である国の脅威を「日本の周囲から一掃する」だろうという声が上がったのである²²。それはロシアがそれだけ日本に対する抑圧

の在り処として見なされていたことを物語っている。満州への旅を記した漱石の日記を見ても、ロシア人に対して「露助」という侮蔑的な呼称が何度も用いられ、こうした感情が漱石の内にも浸透していたことをうかがわせている。

そして後発の帝国主義国として欧米列強に伍し、そのなかで自己を主張しようとしながら、それが裏目に出る形で孤立した状況に追いやられていくという経緯が端的に現われることになったのが、『行人』連載の前年である明治四四年（一九一七）に起きた辛亥革命である。この時も列強諸国は革命の帰趨自体よりも、それを契機として自国の利権を確保しようとする行動を展開したが、清の立憲君主制に固執して革命を抑圧しようとする日本は、自国の不利益を招く事態を回避するべく共和制を成立させようとするイギリスと対立することになった。そして結局日本はイギリスの姿勢に同調せざるをえなくなり、「日本の態度は非干渉に立ち帰りて、一日も早く講和成立し、統一せる政府の設立を希望する外他意なし」（『時事新報』一九二一・二・二六）という事態に立ち至ったのである。

辛亥革命時における日本の振舞いも、清の旧体制を尊重したゆえというよりも、革命による新体制の成立が、自国のそれまでの権益を損ねることを恐れてのものであったことはいうまでもない。しかし〈強国〉としての自覚からみずからイニシアティブを取ろうとする列強への働きかけはことごとく裏切られた。袁世凱が大統領に就任した新政府に対して、列強が保持していた権益を認めさせようとする日本の提案に対しても、ロシア以外の国の賛同は得られず、孤立を深めるに終わった。アジアの国際情勢に対して強い関心をもつ漱石は、日記でもこの

出来事に言及している。明治四四年二月五日の項には先月死んだ三女のひな子や自身の病勢と比較しながら、「新聞を見ると官軍と革命軍の間に三日間の休戦が成立して其間に講和条約をきめるのださうである。彼等から見ればひな子の死んだ事などは何でもあるまい、自分の肛門も勘定には這入るまい」という記述が見られる。前年の大逆事件については何の言及も残していないことと比べれば、漱石の関心の在り処が奈辺にあったかが示唆されているといえよう。『行人』の一郎が自己の支配者的な優越性に固執しつつ、それに見合う様相を示さない周囲との乖離のなかで孤独を深めていくのも、同時代の国際社会における日本の孤立に対する眼差しなしには、生まれえなかつたに違いないのである。

注

（１）その点で生方智子が、精神病の「其娘さん」が一郎の「メタファー」として存在することを指摘している（『歌私的里者のディスクリ』——『行人』の〈語り〉と〈構成〉、『漱石研究』15、二〇〇二・一二）のは妥当である。しかしこの「メタファー」性はむしろ、ここでちりばめられる病んだ女たちをめぐる挿話群全体によって担われている。

（２）引用の後半部は初出では「人の心を確実に握つてゐる方が、遙かに幸福なのであつた」となっていたのが、単行本以降引用の形となっている。『漱石全集』（第八巻、一九九四）の表記は初出に倣っているが、ここでは一般に流布している単行本の形を取った。

（３）山崎正和『不機嫌の時代』（新潮社、一九七六）。山崎は一郎の意識が「十

分を感じるべき瞬間の手前で立ちどまり、同時にその向かう側に突き抜けて」おり、この「二重の空白」が彼を「不機嫌」にしているのだと述べている。これは的確な分析だが、ここで述べているように、「一郎を」不機嫌」にしているのは時間意識の問題だけでなく、半ば以上は対象を空間的に支配、所有することの困難さに関わる問題である。

- (4) 三浦雅士「文学と恋愛技術」(『漱石研究』15、前出)。三浦は「出生の秘密」(講談社、二〇〇五)においても、「一郎の狂気を時代の所産に見せかけようとする意図はその目的をおよそ達していない」と述べている。三浦もこの著書で、漱石が人間の個的な問題と国家の問題を連結させる傾向をもつことを指摘している。三浦は漱石が出生時に捨子同然に扱われたという「秘密」と、西洋の「継子」として進展していった日本の開化を結びつけ、この結合が漱石文学を貫流していると考えている。漱石が自身の「出生の秘密」を国全体の状況に敷衍していたという論には、全面的には賛同しかねるが、個的な人間の存在と国家のあり方を重ね合わせる着想が漱石の表現の基底に存在することは、ここでも述べているように、紛れもない事実である。

- (5) この言葉は矢内原忠男「余の尊敬する人物」(岩波新書、一九四〇)に含まれている。なおこの箇所への言及は海野福寿「韓国併合」(岩波新書、一九九五)によった。

- (6) 『和歌山県史』(和歌山県史編集委員会編、一九八九)、及び www.tanken.com/elevat.html による。

- (7) 引用は琴乗洞編「資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識3」(緑陰書房、一九九九)による。本論で引用した日本人の朝鮮に対する見解は、『太陽』『中央公論』『日本及日本人』以外のものはすべて本書(1~5)によっている。

- (8) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(緑陰書房、一九九九)よ

り引用。

- (9) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識4』(緑陰書房、一九九九)より引用。

- (10) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(前出)より引用。

- (11) 拙稿「(陰画)としての〈西洋〉——『門』と帝国主義」(『東京外国語大学論集』70、二〇〇五・七)「自己を救うために——『それから』と日韓関係」(『紋説』II-10、二〇〇六・一)。

- (12) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(前出)より引用。

- (13) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(前出)より引用。

- (14) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(前出)より引用。

- (15) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(前出)より引用。

- (16) 森本達雄「インド独立史」(中公新書、一九七二)によれば、もともと東インド会社の駐在員たちは、インドの風土や慣習になじもうとする姿勢は不在であったが、一九世紀半ばにイギリスがインドを直接統治するようになると、インド人に対して「ブラック・インディアン」「木石漢」「半ゴリラ・半ニグロ」などと公然と嘲笑し、優越者意識を露骨に示すようになった。併合時の日本側にあった「朝鮮人を同胞とした以上は、之に理想の活火を与へ、前途洋々の大希望を起さしむるにある」(『朝鮮に於ける感想』前出)といった、植民地の民衆を少なくとも自国の「同胞」と見なそうとする姿勢はそこにはうかがわれない。

- (17) 『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識5』(前出)より引用。

- (18) 藤沢るり「行人」論・言葉の変容」(『国語と国文学』一九八二・一〇↓桜楓社『漱石作品論集成』第九巻、一九九一)。

- (19) 初出では「お直は……」となっており、『漱石全集』(第八巻、前出)でもそれに倣っているが、註(2)と同じくここでは単行本以降の形で表記した。

(20) 引用の「ノート」は漱石の留学中に書き留められたものと推測される。この「一己〔個〕人の focal idea」としての「f」は『文学論』では個人の「一刻の意識に於けるF」として捉え直され、「個人的一世の一時期に於けるF」「社会進化の一時期に於けるF」と並列されている。『文学論』における「f」は観念的焦点である「F」に感覚的な色づけを与える要素として位置づけられているが、それはいいかえれば個人の「focal idea」と社会の「focal idea」が〈同次元〉にあるということであり、個人の関心と社会全体の関心が地続きであることがより明瞭化されているともいえる。

(21) この一節は『ツアラストラかく語りき』第三部の「帰郷」の節の冒頭に置かれており、その後のくだりでも反復されている。冒頭部ではこれにつづいて「われは荒き異郷にあつて荒く生きること、ひさしきにすぎた。されば、いまなんじへと帰り来たつて、涙なきをえぬ！」(竹山道雄訳、岩波文庫、一九五三)という、「孤独」を自分の〈郷里〉としてなつかしむ感慨が語られている。「絶対」者に自己を擬そうとする一郎の狷介さはツアラストラの輪郭を想起させるが、両者の志向はむしろ対照的である。後者の目指す「超人」の境地とは、決して他者の上に君臨し、自身に従属させることなく、むしろ自己に本来内在する生命を完全に具現化することによって自己超克した状態を指すからだ。

(22) 有馬学『「国際化」の中の帝国日本』(『日本の近代4』中央公論新社、一九九・五)による。引用の文は室伏高信「日本乎独逸乎」(『東方時論』一九一八・一〇)。

※夏目漱石の作品の引用は岩波書店『漱石全集』(一九九三〜九九)により、ルビは適宜省いた。